

# 佐伯史談

第一〇五号

「郷土史研究誌」  
通算第一二七号

昭和五十一年三月廿二日発行

佐伯史談会

事務所 佐伯市大字稻垣字龍護寺 羽柴方

提言

## 龍護寺觀音堂の修築

佐伯史談会

会長 高木嘉吉

龍護寺は、佐伯地方に於て最も古い歴史を持つ寺院の一つで、寺伝によれば正治（二九一—二）の頃、緒方三郎惟榮の家臣山本源太有明が、主君惟榮の菩提を弔うため佐伯に来て、地を龍護寺部落に卜して、草庵を営んだのが起原とされてゐる。その草庵の跡は部落の東南の丘陵上にあつて、今も兩丈れ受けの石が残つていて、七百七十余年の昔を物語るつてゐる。

有明は觀音を深く信仰して、觀音經を唱えて主君の冥福を祈つてゐた。ある時眼を患つて失明に近い状態になり苦勞してゐた。ある日龍溪の清流で眼を洗つてゐると一鳥が飛來して羽で有明の眼をなでて飛び去つたが、不思議や眼病が忽ち癒えて、物を見る事が出来るようになった。さて又鳥は觀音の化身かと讃嘆礼拝して觀音の功德を称えたが、ふと見ると水中に光あり、光のもとを

尋ねて觀音像を得た。これが龍護寺の秘仏とされてゐる千手觀音である。

有明は早速觀音像を草庵に安置して毎日礼拝してゐたが、靈驗あらたなごまに、次第に参詣者が多くなり、觀音の靈驗は遠近に伝えられた。有明の後、草庵も觀音がどうなつたか、よく分らないが誰かが法燈を守つて後世に伝えられたものである。つ。

特を同じうして梅牟

礼に祀つた佐伯氏は、緒方惟榮の子孫であることから、龍護寺を庇護したことを思うが、遠い昔のこととして記録も伝承もなくさだかでない。十代惟治が龍護寺を修築したことが伝えられてゐるが、丘陵上の草庵を現在の龍護寺の前身、藤田勇一氏の邸宅の付近に移したものとされる。惟治の修築によつて龍護寺は草庵ではなくて、寺院としての体裁を備へ

### 本号の内容

- 提言 龍護寺觀音堂の修築（高木嘉吉）
- 龍 大神惟基と海況（佐伯星雲）（三）
- （佐伯星雲）
- 報告 佐伯古文書の整理（平川清）（七）
- 特別寄稿
- 秋月橋門と寶來飛霞（太熊木島）（九）
- 佐伯藩主奉納の馬居（足立金三）（二二）
- 研究 供養塔と飢饉（岩田善市）（一四）
- 報告 今年度の三大事業（羽柴弘）（一七）
- 春舞 梅牟社女（佐伯惟基日記）（一九）
- 報告 シエークスピアの波紋（雨亭院）（二二）
- 研究 わかふるさと元田熱（市野廉仁）（二四）
- 報告 藩州佐伯村の古書（佐野徳弥）（二五）
- 思想 論はく教師と焼酎（西元由兼）（三二）
- 報告・役員会記録
- 集会行事報告 その他

たことであらう。

大永七年(一五二七)秋、大友義鑑に攻められて、梅牟礼を去つた惟治は、日向落ちの途中龍護寺に一泊し、

枯れてた咲くべき花の種子あらば

拾はせたまへ落ちるこの身を

の一首を残している。

天正六年(一五七八)、大友軍の先陣として日向の高城付近の戦いで戦死した。十二代惟教十三代惟真は龍護寺に葬られ、惟真の墓石は今も龍護寺の境内にあり、また

相館

前九州太守龍徳宗天大禪定門 神祇  
前霜台東岳宗勲大禪定門

と記された惟教・惟真の古公た位牌が観音堂に安置されている。

十四代惟定は、天正十四年薩軍の勅降使十九人を切畑村に迎え、偽って降伏の意を表し、一行を龍護寺に案内したが、途中これを番匠刺の辰とりに迎え撃ち、その辰とんどを撃ち取った。この話から、龍護寺が佐伯氏の接客用に利用されていたことがわかる。

毛利氏の歴代も龍護寺観音を尊崇し、色々と庇護の手をさしのべている。初代高政が慶長十年(一六〇三)養賢寺を創建し、龍護寺観音を養賢寺に祀った。ところが観音は龍護寺に帰ることを望んだので、高政は怒って川に投じたところ、観音は泳いで龍護寺に帰ったと伝えられているが、この伝説はいささか疑問である。

四代高重は観音の尊崇厚く、天和二年(一六八二)観音堂を再建し、梵鐘を鑄造して寄進した。これが現在の観音堂で、爾来約三百年を経過している。それから二年後の貞享元年(一六八四)高重の母自照院は、京都の仏師惺菴に依頼して観音像を修理した。

六代高慶も夫人と共に深く観音を信仰し、高慶は命じ

て観音の龕<sup>がん</sup>扉を封鎖し、そのかわりに夫人宗氏が新たに仏像を寄進した。この新仏は夫人が普門品<sup>ふもんひん</sup>を、樹の葉に一字書いては三拝し字したものを、焼いてその灰で塑像高さ一尺五寸のものを造らせ、増上寺祐天大僧正によって開眼供養が行われたものである。今「前文<sup>まえぶん</sup>さん」とよばれてみんなが礼拝している観音仏がそれである。

高慶は正徳五年(一七二五)、従来山伏持であったこの寺を禪僧持ちと改め、魚鳥の境内に入ることを、開帳の時遊山気分を参詣することを禁じ、それまでは開帳の時警備に足整が当たっていたのを、更に小頭を差添えることとし、年十石の寺領と釣鐘を寄進した。十石といえど二十五歳で、水田五段歩から収穫される高である。この田は終戦後の荒地改革で小作していた人に譲渡されて、今は寺は所有していない。

八代高標は佐伯文庫の創設で名を残しているが、神仏の尊崇を政治の第一義とし、敬神崇祖をすすめた。高標の母馬井氏は安永元年(一七七三)准提観音を寄進した。

以上龍護寺の歴史を概観したが、山本源太有明の創設以来八百年近い歴史を持つ名刹であることが理解されたと思う。ところが寺の中心である観音堂は、再建以来三百年の風雪に荒廃し雨もりがひどくなっている。今回地元稲垣区の方々が起つて「龍護寺観音堂修築期成会」を結成し、修復の計画を進めていることは会心のことである。檀家のない寺、九百万以上の巨費を考える時、期成会の方々の苦勞が思われる。私は私なりに、貧者の一燈を捧げて協力したいと思っている。

先般三の丸櫓門の修復をした時、会員諸君の協力が強い支えとなって私達を励ましたことを思い起し、会員諸君がこの文化財の修復について、再び熱意を示されるよう切望する次第である。

(以上)